

『哲学探究』（ウィトゲンシュタイン・1953年出版）〔鬼界彰夫訳・2020年・講談社〕
パートIII（第9章～第16章）

- ・参考文献：★『ウィトゲンシュタインはこう考えた』（鬼界彰夫・講談社現代新書）
▶『論理哲学論考』（野矢茂樹訳・岩波文庫）
- ・〈 〉は『探究』節番号。ときに大きく改変して引用（（★p）なども同様）。
- ・【 】と■は、加藤の補足・解釈・感想。

【1】著作・草稿・口述筆記録

『論理哲学論考』（～1918年）〈1921年出版〉
『哲学的考察』（～1930年頃）
『（タイプ原稿）T S 213』（～1933年頃）
『青色本』『茶色本』（～1935年）
『哲学探究』（1936年～1946年）〈「第二部」と合わせて、1953年出版〉
『哲学探究第二部（＝『心理学の哲学一断片』）（1946年～1949年）〈同上出版〉
『確実性の問題』（1946年～1951年）

【2】▶『論理哲学論考』から意識引用

- (2・02) 対象は単純である。
(2・18) 像と現実には論理形式を共有しているので、像は現実を写し取る。
(3) 事実の論理像が思考である。
(3・2) 思考は命題で表現される。諸対象に命題記号の諸要素が対応する。
(3・201) 要素＝単純記号【＝名】において「完全に分析された」と言われる。
(5・55) 要素命題は名からなるが、名がいくつあるか言うことはできない。
(5・5563) 我々の日常言語のすべての命題は、そのあるがまま、論理的に完全に秩序づけられている。
——あのもっとも単純なものは、真理をほのめかすものではなく、真理そのものである。
(5・557) いかなる要素命題が存在するかは、論理の適用によって決まる。
(5・6) 私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。【★によれば、言語論的独我論】
(5・641) 「世界は私の世界である」ことを通して自我は哲学的自我となる。【★宗教的独我論】

【3】『論考』から『探究』への連続・不連続（★を参照して）

〈1〉単純な対象とは何か

- (1) ラッセル……「薩長」→「薩摩」「長州」のように言語が改良されて「単純なもの」に至るべき。
(2) ウィトゲンシュタイン……論理と「私」は不可分。← (5・557)

↓

- ・『論考』（「適用」）と『探究』（「使用」）の連続性

〈2〉『哲学的考察』……「文法」「言語の具体的使用」

- (1) 文法について ← 『論考』には2種類の「論理」が含まれていた。
(i) 狭義の論理……「でない」「または」……「いくつかの」など。
(ii) 対象の論理（対象の内的性質）……色、時間、出来事など。
(a) 「2つの色が同時に視野の1つにあることは不可能」 ← ▶ (6・3751)
(推論例) (前提) ソクラテスの着ている外套は赤い。
(結論) ソクラテスは緑色の外套を着ていない。

↓

- (ii) を「文法」と呼称……→ (a) = 「色の文法」……→ 日常性が考察の対象に [(i)も文法の一部]。

- (2) 独我論について←『論考』には言語的独我論と宗教的独我論があった。
 言語的独我論が主題となり、独在性を言葉で表す努力（現象学的言語、瞬間的現在の記述など）と挫折
 (i) 「痛み」を考えるが、独在性を示すことができない…→【『探究』第9章】
 (ii) 独我衝動の克服…→治療としての哲学

〈3〉「(タイプ原稿) TS213」における転換

(1) 日常性への転換

- ・厳密性原理批判……「彼は4時に来た」の真偽は決定できるのか。
- ・計算主義批判……「理解」は他者の発した命題の論理形式を心の中に表現(=計算)することか。

(2) 自然史的転換

- ・プラトン主義批判……自然史的観点へ…→「自然史的観点と内的視点の和解」が『探究』の核心
 内的視点……プラトン主義を否定しても「 $2+3=5$ 」は先験的ではないか。

(3) 言語ゲームの転換

- ・「言語ゲーム(プレイ・劇)」……「言語」と「ゲーム」の厳密性を前提とした同一視の放棄。…→【規則問題】
- ・内容主義的「意味」→機能主義的「意味」(文「早く来い」の意味は、場面によって違う)。
- ・全生活をいくつもの典型的な言語使用局面(ある種の単純な劇)の集まりと見なす。
- ・人間が言葉を習得し使用するとは、「言語劇」の型を1つずつマスターし、編み上げていくこと。

↓

(★p338) 『探究』は「規則問題」と「独我論【の私的言語】問題」を解決したが、「理解」「意味」等については、
 それらが制度内的であることを示したに過ぎなかった。

↓

- ・『哲学研究第二部』…「意味する」「信じる」に具体的に適用。
- ・『確実性の問題』……「言語ゲーム(劇)」を成立させている根底を問う(再び「私」に出会う)。

【4】パートI～IIからの抜き書き(■パートIII単独で内容を理解するのは困難)

第1章【古い言語観を批判】

- 〈1〉『告白』(アウグスティヌス)は、「語」=「対象(意味)の名」と考えているが、
 〈10〉→〈32〉その描写は、すでにある言語を知っている子供が外国に来たときの様子と同じ。
 〈23〉言語には多様な使用があるのだから、多様な「言語ゲーム(劇)」を考えなければならない。

第2章【「名」と「単純なもの」(★『論考』の中心概念への批判)】

- 〈46〉我々は、「名」=「単純なもの」=「単に名指すことしか出来ないもの(『テアイトス』)
 =「個体(ラッセル)」=「対象(『論考』)」と考えてきたが、それらが間違いであることは、
 〈47〉例えば「椅子の単純な構成要素は何か」を考えてみればわかる。

第3章【概念は厳密には規定されない】【規則は規定できない】

- 〈70〉「子供に何かゲームをしてやってくれ」と言われて、サイコロ賭博を教えたら、「そんなゲームのことを言った
 のではない」と言われるだろう。…→【「意図」の重制度性】
 〈81〉「理解する」「意味する」「考える」といった概念について、より大きな明晰さが得られたとき、
 【それらが「心の中の出来事」でなく、何をしているか】が現れるのである。

【規則問題】…→★第7章〈185〉の数列問題(最終形態)…→第8章で「解決」…→【第16章の最後】

- 〈85〉規則は道標のようにそこに立っているのだ。「どの向きに辿ればよいのか=矢印の方向か、逆の方向か」
 といった「規則の規則」についての疑問が必要になるのは、
 〈87〉「誤解を避ける」場合である。通常の場合で目的を果たしているなら、道標に問題はない。
 〈88〉「厳密」の意味は、その目的によるのである。

第4章【『論考』における論理の崇高化を批判（★本書の心臓部）】

- 〈89〉『告白』は、時間について「知っているが、知らない」と言い、様々な言明を心に呼び起こす。
- 〈92〉【今までの哲学は】「本質は隠されている」として、表面の下に存在する何かを見ようとする。
- 〈93〉我々は、文は「最もありふれており、かつ不思議」だから、何か「比類なきことをしている」と誤解する。
- 〈96〉そして、思考と言語は世界の像であるとして、「命題（文）—言語—思考—世界」と縦一列に並べるのである。
- ↓しかし、
- 〈98〉我々の言語のあらゆる文は「そのまま問題がない」。
- 〈108〉文は、形式的統一性をもつものではなく、【家族的類似性】をもつ。
- ↓ではどうするか
- 〈109〉説明ではなく記述を、ずっと以前からよく知られていることを組み合わせることである。
- 〈122〉我々の無理解の主な源は、我々の言葉の使用が見渡せないことである。
- 〈133〉いまは、様々な例を通じて1つの方法を示そう。

第5章【「理解する」という言葉の使用を見渡す】

- 〈143〜〉自然数・数列の【続き】が「わかった」について

↓

第6章【「理解」の心的行為は厳密に規定できない】

- 〈180〉「1, 5, 11, 19, 29, ……」という数列の続きが「わかった」は「合図」である。
「合図」が正しく使われたかどうかは、続いて彼が何をするかによって判断される。
- 〈183〉「続けられるぞ」と「式が思い浮かんだ」は、ある状況において「同じ仕事」をする。

第7章【数列で示す規則問題の最終形態】と【「意味」について】

- 〈185〉ある生徒が「0, 2, 4, 6, ……1000, 1004, 1008, ……」……（*）と書く。
これは、指差しの身振りに対して「生まれつき指先の方向ではなく、手首の方向へ反応する」のに類似した（★不気味な）【想定】である。
- 〈187〉しかしそれはともかく、この生徒に対して教師が（この数列を教えたときすでに）「1000の次は1002を書くべきこと」を「意味していたのだ」と言うのは、「訊ねられたらそう答えた」ということなのである。
- 〈188〉であるのに、我々は、意味する行為が実在を先取りできるかのように考えてしまうのだ。

第8章【「規則のパラドックス」の明示と解答】 【「規則」の新しい見方】

- 〈201〉我々の「規則のパラドックス」は、
(1) 「すべての行動は規則に一致させることができる【（*）の規則＝「1000を超えたら+4」】」から、
(2) 「規則は行動を決定できない」というものであるが、
これがパラドックスに見えるのは、「規則というものについての把握の仕方」が間違っているからである。
- 〈202〉すなわち「規則に従う」とは、ひとつの実践なのである。
- 〈240〉「規則に従う」ことは、言語が作業をする足場であり、
- 〈241〉それは生活の形の一致なのだ。

★「規則に従う」……すべての言語ゲームの根底にある原言語ゲーム（原制度）による実践。

（たとえば数列において「同様に」を適用する能力を発揮すること）（★p286, 296）

★原制度は自然ではない……「火星において、道標のようなものに平行に進む生物を見たとしても、私にはこの生物が「規則に従っている」という資格はない。」(L.W)（★p300）

- 〈242〉意思疎通には、定義の一致だけでなく判断の一致も必要である。しかしそれは論理を廃棄しないのである。
■原制度と判断と論理の関係はどうなっているのか。

↓

★「硬化理論」（『確実性の問題』）……具体的判断がくり返される中で、ほとんどいつも同じ結果になる判断が次第に硬くなり、算術や論理の規則になる。（★p352）

第9章【私的言語は可能か → 感覚語「痛み」は内的体験の名か → 「痛み」劇】

【私的言語は可能か】

〈243〉「私的言語」＝「他人には理解できず、内的体験(感覚や気分)を自分だけのために使う言語」を想像できるか？

【表出説＝「痛い」は他者へ示す言語的行為】(←「表出説」訳注p517-1)

〈244〉感覚語の起源＝「痛み」は叫びに**取って代わる**のであって、叫びを描写(意味)するのではない。

【「同じ」と哲学の錯覚】

〈253〉「他人は私の痛みを感じるができない。」などと言うが、そもそも2つの「(彼と私の)痛み」が「同じ」と語ることができるのは、そう言うことに「意味がある」ときだけである。

〈254〉にもかかわらず、「同一」という言葉に置き換えて何かが解決したかのようにしてきたのが哲学である。そうした哲学の心情表出を素材にして、その**錯覚を治療する**のが新しい**哲学**である。

数学者が、数学的事実の客観性や実在性について「言いたくなる」ことも**哲学**が治療すべきものである。

【私的命名は不可能だから、私的言語は不可能】

〈256〉〈243〉の「私的言語の可能性」に話を戻す。

自分の「感覚表出」を「感覚語」に結びつけたら、他人も理解することになるから「私的」でなくなる。

では、「感覚表出」も「感覚語」もない場合には、「感覚＝名」(私的命名)となるのか。

〈257〉しかし「自分の痛みに名をつけた」と言っても、すでに多くのこと(方法や目的など)が準備されている。

〈258〉感覚「E」を日記につける話。

〈261〉そもそも「感覚」も共通の言葉であって、「彼が「E」と書くとき「何かを持っている」と言い換えたとしても、「何か」も「持っている」も我々の共通の言語の一部である。

【「痛い」＝人である。】

〈286〉誰かが手に痛みを感じている場合、我々が話しかけて慰めるのは、苦しんでいる人である。

我々はその人の目を見るのだ。

〈287〉どのようにして私の心はこの人間に対する同情で満たされるのか？

【感覚語を使う言語ゲーム(箱の中のカブト虫)】

〈293〉(1)全員が箱を持っていて、我々が「カブト虫」と呼ぶ何かが入っているとす。

(2)誰も他人の箱の中を見ることはできない。

(3)全員が「自分はカブト虫が何であるかを、自分のカブト虫を見ることのみによって知る」と言う。

(4)それぞれの箱の中のものも違っていることも、変化し続けていることもある(空であることさえ)。

(5)それでも「カブト虫」という言葉が使われているのである。

(6)このとき「カブト虫」という言葉は、「ものの名」として使われていないであろう。

(7)つまり、「箱の中のもの」は、この言語ゲームに属していない(役割を果たしていない)のである。

(8)したがって、感覚語を使う言語ゲームにおいて、「対象と名」というモデルを用いるのは、つまり感覚語を内的体験の名とするのは誤りなのである。

〈295〉ところが、我々は哲学しているときに、「カブト虫」に像的な描写を見てしまうのである。

〈298〉そして、**自分自身に対して**感覚を指し示しながら、「大切なのは**これなのだ**」と、本当は「何も伝えないうこと」を、こんなにも強く言いたくなるのである。

【「他人の痛みを想像する」＝態度】

〈300〉「痛み」は「対象の名」ではないのだから、「彼の痛み」への想像を、像に置き換えることはできない。

〈302〉痛みを苦しんでいる人とは、痛みを表出している人なのだ。(訳注p518-23 →)つまり「他人の痛みを想像する」とは、「他人の痛み」と呼ばれる感覚を自分の中に【像として】再現することではなく、「痛みを感じている人」の立場に**自分を置く**こと、そうした**態度**をとることなのである。

■私的言語を否定しても、**自分**は消え去らない。

- (★p324) 【〈286〉や〈302〉に示された】この新しい「痛み」概念によれば、「私は痛い」と「彼は痛い」の違いは「他者に訴える」と「他者に同情する」ことの違いであり、態度の違いなのである。
- (★p326) 「痛み」とは感覚の名ではなく、人間が習得していく「劇の題名」である。
- (★p367) 『確実性の問題』において「私は…知っている」と「彼は…知っている」の違いが重要な問いとなる。

—— 第10章～第16章について ——

- (★p328) 「心的諸概念に関する考察集」であるが、重要なのは、意味、意図、信念等の**重制度性**である。
〈70〉の「サイコロ賭博」や〈186〉～〈187〉の「数列のパラドックス」は、「意図」の重制度性の問題であり、「数列のパラドックス」は、最終章の最後に【再度】「解決」される。
- (★p333) 重制度性……制度だけでなく**状況に**、つまり二重に依存していること。
← 〈337〉意図はその状況の中に、人間の慣習・制度の中に埋め込まれている。

第10章【「思考」についての誤解】【意図の重制度性】

- 〈316〉我々は誤解して、「考える」という言葉の意味を「**自分自身を見つめる**」ことの中に見出そうとする。
- 〈329〉言葉を使って考える場合、言葉の表現に加えてその「意味」が頭に浮かぶわけではない。
むしろ、言語そのものが思考の媒体なのだ。
- 〈330〉「ペン先が丸くなったなあ」を言葉を使わず、思考内容だけを考えてみてほしい（できないだろう？）。
- 〈335〉我々は、思考は（すでに以前から）そこに存在し、ただその表現を探しているだけだと誤解する。
- 〈337〉意図はその状況の中に、人間の慣習・制度の中に埋め込まれている。
私があらかじめ文の形を意図するというのは、私がドイツ語を話せるから可能なのだ。
- 〈352〉我々の【像による】思考が、排中律を使って、奇妙ないたづらをする。
像＋排中律 …→ ある可視的な像が「神にはその全体が見える／我々には見えない」
→「彼がこの感覚を感じているか、感じていないのか」のどちらかで、
それ以外の可能性はない【考察すべきことがない】と思いつむ。
しかし、こんな像を使っても何もわからないのだ。

第11章【像—哲学の間違いのもと】

- 〈403〉観念論・独我論者が「私=L.Wの痛み」だけに「痛み」という言葉を使えと要請し、それが受け入れられたとしても、他の人々は別の表現を使って今まで通りの生活を営むだろう（私が得るものは何もない）。これに対し、实在論者は「L.Wの痛み＝他の人の痛み」だと反論するが、どちらも「痛みの像」を前提にしている。
- 〈404〉「**私が**痛い」のではなく「**私は**痛い」のである。
- 〈405〉「私は痛い」と言うとき、私はただ、自分に注意を向けさせたいのだ。…→第9章「痛い」＝態度」
- 〈406〉「**私の**」にも様々な使用方法がある（哲学の間違った使用例も）。
- 〈416〉「私は意識を持っている」と言う場合、私はいったい誰にそれを伝えているのか。
- 〈426〉「彼の心の中」といった像を用いた表現は、我々には「知り得ないことを知る」神に合わせて作られていて、その神は無限の数列の全体を見たり、**人間の意識の中を覗き込んだり**する。しかし、そんな表現方法を用いても、大したことはできはしない。我々には力が欠けているのだから。……→〈352〉再説

第12章【『論考』がもたらすパズル】（「信念」〈472～〉…→『確実性の問題』）

- 〈429〉私が間違っ【何が「赤い」】と言う ⇐ その【何が「赤くない」】⇐【何が「赤い」】
- 〈430〉哲学者は、「命令（記号）— 実行（使用）」と捉え、「この間の溝」に「理解」「生命」「隠されたもの」「瞬間的現在」などがあるとして、袋小路に迷い込む。

- 〈448〉【『論考』的「赤●」「夢●」「痛み●」を図示すると、「事実●●●<事態●●●○○○」となる。
つまり、○○○は「ない」が「在る」。「痛みがない○」には先ず「痛みが在る●」が必要だと考える。
しかし、日常は「痛みがある」「痛みがない」で足りているのである。】
- 〈449〉人は、文を使用するときも「各々の言葉＝各々の心像」と考えてしまう。
それはまるで、雌牛の「引き渡し書」が意味を失わないためには、つねに雌牛の心像を「引き渡し書」に伴わ
せていなければならない、と信じるようなものだ。

第13章【『論考』の言語観】【文・音楽の理解】【否定】

- 〈494〉我々が「言語」と呼ぶものは、日常的言語である。
- 〈501〉「言語の目的は思考を表現することである」と『論考』は書いていたが、
←▶ (3・2) 思考は命題で表現される。諸対象に命題記号の諸要素が対応する。
それなら、「It rains.」のItは何を表現しているのか？(訳注p525-3)
- 〈503～510〉『論考』のように〈96〉「命題(文)一言語一思考一世界」と並べても記号の意味は分からない。
■「ラングは1枚の紙。表面(思考)を切ろうとすれば、裏面(音)も切らなければならない(ソシュール)
- 〈520〉『論考』は「文は可能な事態の像(事態の可能性を示す)」と主張したが、そもそも文の使用についてよく考
えていなかった。
- 〈524〉絵画や物語が我々の心を奪うという事実を、当然のことと見なさず、不思議なことと見なすのだ。
- 〈531〉文の理解(1)……別の文で置き換え可能(その文の思考が他の文と共通)。
文の理解(2)……置き換え不可能。音楽の主題や詩(「わかる」が、言葉では言えない)。
- 〈532〉「理解」という言葉が2つの意味を持つのではなく、その使い方がその意味を作っていると、私は言いたい。
- 〈549〉「二重否定＝肯定」が、本性であることも、本性でないことも、我々の本性に関連している。
- 〈554〉否定を「声の高さ」で表現する言語があったとして、二重否定はどうなるか？
- 〈561〉「である」の「意味」が2つ(「バラは赤色である」「2×2は4である」)なのは、使用が2つあるからである。

第14章【「期待」型心的概念】【捉えがたいもの】

【「期待」型心的概念とは】

- 〈575〉(1)「椅子に座るとき、椅子が私を支えるだろう、と信じていた。」……………「期待」型
(2)「彼の行動にかかわらず、私は……と信じ続けた。」
……(1)と同じ語「信じる」が使われているが、これは「思考」の繰り返し。
- 〈577〉(3)「彼が来るのを期待している(来るだろう)。(来訪に心を奪われていない)」……「期待」型
(4)「彼が来るのを期待している(待ちわびている)。」
- 〈581〉期待は、それが生まれる状況の中に埋め込まれている。
- 〈583〉今起きていることが意味を持つのは、環境においてなのだ。
人は心からの愛や希望を、1秒間持つことができるだろうか？
- 〈584〉**王の頭に王冠がかぶせられる1分間の過程を、その環境から切り離してみたまえ。**
- 〈586〉同じ言葉「期待・待っている」でも、思考、行為、報告など、状況によって異なるのである。

【捉えがたいもの】

- 〈608〉人が(ある心の状態について)「捉えがたい」と言うとき、(本当は)捉えているのであり、それを哲学が要
求する像＝{特定の状態1、特定の2、……}の中に数え入れることを拒否しているのである。
- 〈610〉コーヒーの香りを記述してみよ！なぜうまくゆかないのか？語彙が不足しているからか？
【ある音楽を聴いて】私は「これらの音は何か素晴らしいことを語っている、しかしそれが何かはわからない」
と言いたいのだ。これらの音は1つの強烈な身振りだ。だが私には、それを説明するいかなるものも、(切り
離して)その横に並べることはできない。深く心の底からうなずくだけで。ジェームズ「我々には語彙が欠け
ている。」それならなぜ新しい言葉を導入しないのか？
■〈286〉「我々はその人の目を見るのだ」も導入ではないか？

第15章 【意志】 ★L.W の内面的動機に基づく特殊な側面

- 〈613〉 『論考』期の私は「意志を意志することはできない」と言いたかったのだ。
← ▶ (6・373) 世界は私の意志から独立である（意志と世界には論理的連関がない）。
← ▶ (6・43) 意志は言語で表現しうるものを変化させることができない。
- 〈619〉 「私は意志しているのに、体が言うことをきかない」とは言えるが、
「私の意志が言うことを聞かない」と言うことはできない（意志は「駆り立てる」のみ）。
- 〈620〉 そうすると、「私がする」という表現は、経験的内容のない、ある特別な意味を持っているように見える。
- 〈621〉 しかし、「私が腕を上げる」とき「私の腕が上がる」。【意志は言語表現を変える】
(1) 「私が腕を上げる」から (2) 「私の腕が上がる」を差し引いたとき、何が残るだろうか？
- 〈622〉 たいていの場合【怪我していないときなど】、私は試みたりしない。
だから「(1) - (2) = 試み」ではない。
- 〈628〉 「(1) 私が腕を上げる」と「見よ！ + (2) 私の腕が上がる」を比較すれば、
「(1) - (2) = 驚き「見よ！」の不在である」と言えるかもしれない。

第16章 【「意味していたのだ」——「数列のパラドクス」の★最終的な解決】

- 〈692〉 「君にこの規則を与えたとき、この場合は……としなければならないことを意味していたのだ」と言うことは、その規則を与えたときに、その場合について考えていなかったとしても、正しい。
(ただし問題になるのは、その人についての判断であり、例えば数学教員であることは、その基準になる)
- 〈693〉 このことは「意味する」の文法と「考える」の文法が異なっていることを示している。
■ 「pかつ(～q)」は正しい。⇒「p≠q」を示す。
そして、意味することを心的活動と呼ぶことほど間違ったことはないのだ！

【6】 【『知への意志』(フーコー・1976年)との類似と差異】

(1) 『論考』的真理観への批判

少なくとも中世以来、西洋社会は告白というものを、そこから真理の産出が期待される主要な儀式の1つに組み入れていた。……西洋世界における人間は、告白の獣となった。そこから多分、文学における変容も由来する。……そこからは、あの……**哲学する方法**というものも生まれてきた。**真なるもの**への根本的な関係を、……移ろい易い数多の印象を通じて意識の確実性を解き放ってくれる、**自己の検討**というものの中に求めるのである。……我々には、**真理は、我々の最も秘密な場所で、ただ白日のもとに立ち現われることのみを「要求して」**いるかに思える。(p77・縮訳)

(2) 言語ゲーム(劇)

権力と知が1つの仕組みに結びつけられるのは、まさに言説においてなのである。またまさにこの理由によって、言説というものを、……様々な戦略の中で演じ＝働き得るような要素として、……この**配分＝配役をこそ復元**してみなければならないのだ。……語る者とその権力関係における位置、彼が身を置く制度的関係に従って、……また、同一の表現を全く相反する目的へとずらし、再度用いるそのやり方と共にである。【言説の世界に】**錯綜し不安定な1つの働き＝ゲーム**を認めなければならないのであって、そこでは、言説は、同時に権力の道具にして作用＝結果であるが、しかしまた、障害、支える台、抵抗の点、正反対の戦略のための出発点でもあるのだ。(p130・縮訳)